

第1回

千葉氏サミット議事録

● 基調講演

テーマ「東アジア世界・列島社会の中の千葉氏」

■ 講師 野口 実先生

(京都女子大学名誉教授、同大学宗教・文化研究所客員研究員)

■ 平成28年8月21日(日)

■ 三井ガーデンホテル千葉

○司会 皆様、大変長らくお待たせをいたしました。ただいまより第1回千葉氏サミットを開始いたします。

私は、本日の司会進行を担当させていただきます千葉氏顕彰会事務局の柴山ゆきえと申します。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。(拍手)

初めに、主催者の千葉氏サミット実行委員会委員長、千葉滋胤よりご挨拶を申し上げます。よろしくお願ひいたします。(拍手)

○千葉滋胤(千葉氏サミット実行委員会委員長) 皆さん、こんにちは。お暑いところをご来会賜りましてありがとうございます。天気予報で、きょうはまた雨でもと思っただら、皆様の心がけと申しますか、天の救いと申しますか、暑いけれども、雨でなくて、ご来会いただきましてありがとうございます。

きょう一日のスケジュールが混んでおりますので、また改めて後ほどご挨拶する機会があったら申し上げますけれども、私どもは千葉市とともども、千葉氏の研修について日ごろからやっておりましたが、本日は、私どもがいつもご指導いただいております野口先生をお迎えしまして、ご高話をいただくということになりまして、本当に喜んでおります。先生は、今、京都女子大のほうで名誉教授としてお仕事をされているわけでございますけれども、ご出身は千葉市でございますし、先ほど来のお話から言うと、亥鼻山の下あたりでお生まれになって、それこそ亥鼻山で遊ばれたのではないかと申されます。そういうことで造詣が深くございますし、今は千葉よりも京都のほうに仕事で行っていらっしゃるわけでございますけれども、そういうことを通しまして、皆さんと今後ともいろいろおつき合いができればと私どももご祈念申し上げているところでございます。

今回の催しにつきましては、まだ市長はお見えではございませんけれども、千葉市の協力を得まして、いろいろ行事を進めてまいります。きょう一日の中で、短い時間ではございますけれども、よろしくご協力のほどお願ひ申し上げまして、早速先生のほうの高話を頂戴したいと思います。ひとつよろしくお願ひ申し上げまして、ご挨拶にかえます。(拍手)

○司会 ありがとうございます。

それでは早速、基調講演に移りたいと思います。講演者は、中世史研究の第一人者で、京都女子大学名誉教授、同大学宗教・文化研究員でいらっしゃいます野口実先生にお願ひ申し上げます。テーマは「東アジア世界・列島社会の中の千葉氏」です。野口先生、どうぞよろしくお願ひ申し上げます。(拍手)

○野口 実 ただいまご紹介いただきました野口でございます。日本中世史学界の第一人者というのほうそでありまして、1,000人ぐらい第一人者がいる中の1人でございますので、ご了解いただきたいと思います。

それから、一番最初にいろいろと自己紹介をしようと思っていたのですが、千葉会長さんに素性を全部ばらされてしまいましたので、それはなしにして話をしたいと思います。それにしても、私は千葉東高校の出身なのですけれども、後輩たちが市役所で随分活躍しているようで、そればかり、さっきから喜んでおります。どうも私的な話で申しわけございません。

それで、きょうのお話ですけれども、資料をご覧ください。パワーポイントみたいなものを使うのは、私は好きではないというか、できないものですから、申しわけございません。恐らく手元にあったほうが見やすい。会場がちょっと暗くて見にくいかもしれませんが、申しわけございません。それに基づいてお話をさせていただきたいと思います。

テーマは「東アジア・列島社会の中の千葉氏」ということです。千葉氏という呼称について、「ちぼうじ」とおっしゃる方が多いのですけれども、これはシティとしての市との区別ということでは構わないと思いますが、基本的には、氏というのは、藤原とか平とか源が氏でございますので、これは家名ですよね。今、私たちの名字は藤原さんとか平さんとか野口とか、いろいろいるわけですけれども、名字は両方混在しているわけですが、歴史的には、これは「ちばし」と表記しておいたほうがいいと思います。三浦市とか小山市とかという地名が家の名前になるわけです。だから、混同してしまうこともあり得るということですね。ただ、学術的に、あるいは教育的には「ちばし」という呼称がいいと思いますので、私は「ちばし」と表記したほうがいいのではないかとということで提案させていただきました。

千葉氏というのは中世の武士の代表的な存在として評価されるわけですがけれども、武士のイメージと申しますと、私も子どものころ武士が好きだったわけですが、とても無骨ですが、とても健全で、素直で、体育会的と申しましょうか、男らしい。それに対して京都の貴族というのは女々しくて気持ち悪い。おしろいばかり塗りたくっているようなイメージがありまして、これは、私は大嫌いでした。ですから、武士というのは、あまり難しいことは考えない、文化的な側面も薄いようなイメージを持っていたわけですが、最近の研究ではというか、これはちょっと勉強すればわかることですし、ちょっと考えればわかることですけれども、武士というのは何で武士なのか。武装して平気にいるというのは、や

くぎではないかということになるわけですが、それが国家的存在として存在し得るのは、国家守護の担い手、あるいは王権守護の担い手として存在していたから、そういうアリバイがあるからですね。ですから、武器を携帯していても問題がない。文句は言われたいというわけです。

ですから、国家守護、あるいは王権守護ということになると、当然京都とのかかわりが重要になってまいります。内裏大番役というのを高校のときに日本史で学ばれた方は記憶があると思いますけれども、鎌倉時代の御家人の仕事で一番大事なのは、將軍の御所を警護するよりも、天皇の御所を警護することが一番重要な仕事だった。天皇の御所は京都にあるわけで、京都とのかかわりというのは、武士を考える上で非常に重要なことになってまいります。

武士というのは、軍隊のことを考えればすぐわかることですが、武器とか武具は最先端のものが必要ですよ。それから、軍事的な技術、情報ですね。地方社会で君臨するために、それなりの権威というものも必要です。それから、今は情報戦になりますが、当時は合戦のときに、言葉戦い、「やあやあ、我こそは」というものですね。自分はどれだけ正当な存在なのか、おまえたちはこの戦争に正当性がないぞということを語るときの弁論術とか、歴史的な知識とかが必要になる。

だから、武士というのは、体育会系と言うと体育会系の人に怒られて、今、オリンピックをやっている中で、そんなことを言うと袋だたきに遭うかもしれませんが、頭の中まで筋肉みたいな人が武士をやっているというわけではなくて、非常に知的な人たちで、「文武両道」という言葉がありますけれども、まさにそういう存在。それから、都市とか流通とか情報とかかわる拠点を押さえているような存在でなければ、武士として発展はできないということになるわけです。

したがって、従来のような武士認識、つまり、主君に忠実であるとか、男らしいとかという側面で武士を評価し、これを前提にして地域振興を図るなどというのはちょっと無理があるということです。幸い千葉氏の場合は、このグローバル社会において、お手本になるといいでしょうか、千葉に住むということが非常に幸せを感じられるような情報を中世から発信してくれる存在なのですね。きょうは、そういうことをお話ししようと思います。

それから、女性もそうです。これはいつもカルチャーセンターなんかでお話ししているのですけれども、日本の社会では、古くなればなるほど女性の地位は低いとお思いの方が

いて、そういう健気な女性が後ろにくっついてくるから、俺たち男はいい気分でいられるみたいなことで武士が好きな方も多いのですが、とんでもない話でございまして、逆に、女性にくっついてる男たちが鎌倉時代には多いのです。そんなことを言うと、何を言っているんだ、女子大の先生だから、そんなことを言っているんだろうと思われるかもしれませんが、今、近代史だけやればいいという話をされる方がよくいますが、そうではなくて、前近代にこそ日本のよさがある。その前近代社会、特にあまり規制のない中世社会において、千葉という空間がどういうところであったのか、そういうことについても、きょうはちょっとお話をさせていただきたいと思っております。

さて、資料でございまして、A4のプリントで、表裏で印刷されていると思いますが、全部で10ページございまして、ちょっと見てください。最後のほうの3ページ分ぐらいが地図とか表でございまして。地図とか表のところは話の筋に関係ないのですが、AとかBとか書いてありますが、時々、資料を参照していただければと申し上げますので、その辺もご覧いただきながら聞いていただければ話が理解しやすいのかと思います。

1 ページ目の1番、「千葉氏の成立と展開」からお話をいたします。大体きょうのお話は、千葉氏というのは中世全体を通して存在した武士ですから、話したら切りがなくなってしまうので、平安時代から鎌倉時代ぐらいまでが中心になってしまおうと思いますが、千葉氏がどのように展開したのかというところからお話をさせていただきたいと思っております。

千葉氏とは何者かということ、下に系図を入れておきましたが、桓武平氏の良文流の中の忠常流からである。こう言われても、歴史が好きでない人は何を言っているんだということになると思いますが、もし関心があったら後で調べてみてください。

平忠常の乱というのが11世紀の初めに関東で起きますけれども、その平忠常の子孫の中で、その後、一番嫡流——何が嫡流なのかみたいなことも、江戸時代あたりになってからやたらに言うようになったので、特に中世前期においては、実力が問題で、何番目に生まれたかというのはあまり関係ないのですけれども、一番大きな勢力になったのが千葉氏であるということですね。平忠常の子孫の系統のことを両総平氏といいます。伊勢平氏とか常陸平氏なんていうのと同じです。両総というのは、皆さん千葉にお住まいですから、すぐお気づきだと思いますが、上総、下総ということですね。安房はちょっと違うのですね。系統が違う一族がいるものですから、両総平氏といいます。

展開している下の系図を見ていただくとおわかりになると思いますが、その両総平氏の平忠常の子孫の中で、12世紀の初めごろに、下総国の千葉郡千葉郷、都川水系とい

う——河川というのは、当時、交通路として非常に重要なのですね。非常に大きな機能を果たしていたのですけれども、東京湾に面していたこの地に千葉庄という荘園が成立するのですが、院政の時代です。その在地の領主、現地の支配者として成立した家が千葉氏であるということです。

そして、この千葉氏は、代々下総国の権介職を継承する。下総国というのは今の千葉県の北部、茨城県の一部も含まれますけれども、そのあたりの、要するに国司の中の、長官（かみ）、次官（すけ）、判官（じょう）、主典（さかん）という四等官があるのですが、2番目の在地における有力な行政官として存在したということです。千葉を本拠地にして、下総権介を継承している家だから、千葉介と名乗ったわけです。これは、ほかにも神奈川県、相模国の三浦介とか、遠く山口県、周防国の大内介なんて、当時そういうふうに分称する。国衙在庁系武士団ということで成立するわけですが、その1つである。鎌倉時代になると下総国の守護になるわけです。以後、室町時代に至るまで、下総国の守護職を継承する家であるということで、それが千葉氏である。

ただ、千葉氏が最初から平忠常の、嫡流という言い方をするとちょっと語弊があるのですけれども、一番大きな勢力として存在したかということ、そうではなくて、後につくられた系図ではそうするのですね。うちの家は、もともとこんなに権威があるんだぞということになるので。ですから、後世つくられた史料で歴史を解釈するというのは、非常にフィルターがかかっているのです。気をつけなければいけないのですけれども、もともと両総平氏の中で最大の勢力を誇っていたのは、源頼朝が挙兵した当時、12世紀のころは、上総氏という。上総国の玉崎庄、太平洋側ですけれども、ここを本拠地にして存在で、例えば、鎌倉幕府ができた当時には上総広常なんていう人がいて、この人は、頼朝が挙兵したときには、『吾妻鏡』という鎌倉幕府の公的歴史書によると、2万という軍勢を率いて頼朝に参向した。これに対して千葉常胤は300という。桁が全然違うわけですね。この辺の数字についてはいろいろ問題があるのですけれども。その上総氏が滅びてから後、千葉氏は大きな力を持つようになったということ、これは押さえておかなければいけないと思います。上総広常の滅亡は1183年の暮れ、寿永2年という年です。

それから、千葉氏の中でも千葉介と名乗る、後の戦国時代まで続く千葉氏系と別の系統が、実は鎌倉時代の前半期には大きな力を持っていた。これは上総千葉氏。皆さんご存じの千葉常胤の孫の常秀という人の系統が上総千葉氏ですけれども、むしろこちらのほうが千葉介家よりも大きな力を持っていたということもわかっています。したがって、こう

いう存在がなくなってから後、鎌倉幕府の御家人制のもとで千葉介家は惣領となります。

ただ、よく地元で歴史を研究されている方などで、ここは一番嫡流だとか何とかという話が語られて、先祖の自慢話みたいになって、家を大事にするということで、日本の社会では、歴史とはこういうものだという歴史認識が普及していて、それが女性とか若い人たちの歴史嫌いの背景になっていたりする部分もあるのですけれども、実のところ、千葉介と名乗る系統は、中世の終わりのころには3つあるのです。下総の千葉介、当時、本佐倉に本拠地があったのですけれども、その千葉介家です。天正18年（1590年）に小田原の北条氏と一緒に滅びます。それから、武蔵国にも千葉介と名乗る一族がありました。それから、肥前、佐賀県小城にも千葉介と名乗る一族がありました。ですから、どれが本家とか何とかということではなくて、千葉介という呼称がいろんな地域で権威のある呼称だった、そののところだけ押さえておいていただければいいと思います。

1 ページ目は系図がいろいろ書いてあるので、ご覧いただければいいと思いますが、2 ページ目のほうに話を進めさせていただいて、千葉氏の一族も相当幅が広い。日本中、千葉氏の一族がいるのです。ですから、きょうは千葉氏サミットということで、いろんな地域の方たちがお見えになって、主な千葉氏の一族が展開した地域の市長さんとか、歴史の関係の方、博物館の方とかがお見えになっていますけれども、千葉氏の一族を大きく分けると、鎌倉幕府ができる以前に成立した千葉氏の一族と、千葉常胤のときから千葉氏というのは非常に大きな勢力を持つようになった。列島規模で展開するようになった。これは後でお話ししますが、その千葉氏の一族があるのですが、レジュメには常胤以前から分かれた一族を a、常胤の庶子とか、その子孫たちを b としました。

a としては、たくさんあるので、そのうちの代表的なものしか出していませんが、例えば、椎名氏がそうです。椎名さんは日本中にいますけれども、千葉市内に椎名という地名がありますね。そこが名字の地でございます。戦国時代に越中に椎名氏というのがいて、これは非常に大きな活躍をして、上杉なんかと戦ったというので、ご存じの方もいると思いますが、鎌倉時代の初めには、実は阿波、徳島県にも地頭職を得ている。最近、史料を見つけました。だから、四国とか北陸地方ですね。

それから、伊北と書いて「いほう」と読みます。上総氏の一族ですけれども、上総国伊北庄、今の大多喜あたりにいた伊北氏というのは、出雲、島根県に展開しています。ほかにもいっぱいあるのですけれども、省略させていただきます。

常胤の子孫からは、きょうのサミットにも相馬から、相馬の研究の本当の第一人者であ

る岡田清一先生がお見えになっていますが、例えば相馬氏は、千葉常胤の次男の師常から出ている。

それから、武石と書いて「たけし」と読むのですけれども、これと大須賀、国分は、東北地方の太平洋岸あたりに所領を持って展開しています。

それから、東と書いて「とう」は、千葉県香取郡にございます東庄町の東です。その一族に木内（きうち）、「きのうち」ともいいますけれども、こういう存在があります。特に、東氏は美濃で非常に活躍します。これは高校の教科書に載っていますが、室町時代に東常縁という人物が、連歌師宗祇なんていう人に古今伝授をするわけですけれども、その東氏。歌の家ですね。京都と非常にかかわりの深い、鎌倉時代から在京人といって、京都で活動することの多かった東氏。

それから、後で具体的に木内氏出身のお坊さんの話をしますけれども、木内氏は淡路島の淡路です。淡路島に千葉氏の一族がいたのかみたいなことになるのですけれども、国の始まりは淡路島の淡路です。

それから、伊賀。伊賀は、実は千葉介家が鎌倉時代に守護を務めた。伊賀というと千葉とあまり関係ない。三重県の北のほうです。そんなところに千葉氏は関係していたのかということになる。京都のすぐ近くですね。伊賀の守護をやっていたのです。伊賀というのは大変なところで、鎌倉時代の末期から南北朝のころにかけては、戦後の歴史学界で有名な石母田正という人が『中世的世界の形成』という大著を書いて、戦後の歴史学の基礎を築いたわけですけれども、その『中世的世界の形成』という本の中で取り上げられた伊賀国黒田庄という荘園があるのですが、その黒田庄のある伊賀国の守護を実は千葉氏が務めていた。これは大変なことですね。上部構造のことは戦後の歴史学ではあまり考えなかったのかもしれませんが、重要な事実です。ちょっと専門的な話になって申しわけありませんけれども、あまり楽しい話ばかりではありませんので。

それから、白井氏は安芸国に展開しています。常胤の孫の胤時という人の子孫から出ている家ですけれども、安芸国で毛利なんかと戦った。厳島神社のあたりで、宮島の戦いなんていうのがありますけれども、白井氏は水軍化していますね。こういう存在もあるわけです。

それから、木内氏で言い忘れましたが、淡路と伊賀だけ申しましたけれども、大和もあります。市長さんがお生まれになったのは奈良県の天理市で、私も最近、天理で石上神宮とか、その近くの永久寺の跡に行っ、研究テーマの縄張りにはしているのですけれども、

大和国も千葉氏の所領があったと言うと、市長さんはちょっと喜ばれるのではないか。まだお見えになっていないかもしれませんが、そういうことであります。だから、千葉氏は非常にグローバルな存在なのです。

それから、鎌倉時代の武士というのは、このように散在所領といいまして、1つのところに固まって領地を持っていない。全国にばらばらに持っています。ですので、郷土史という概念で鎌倉時代の武士のことを考えるとわからなくなります。私も少年期はそうだった。千葉のことを知っているのは俺だ、千葉のことを研究しているのだから、千葉のことは俺が一番知っているんだぞ、みたいな気でいたのですけれども、そうはいかないですね。研究対象である千葉氏の一族そのものが、例えば常胤もそうだと思いますが、いろんなところをしょっちゅう動いているわけです。いろんなところに拠点を持っているわけです。そういうところの文化を身につけていたり、情報を得ていたりするわけですから、今の研究者のほうが世界を知らなかったりするのですね。私は鹿児島とか京都とか、いろんなところの大学に移って、行くたびにその土地に千葉氏がいるのです。実は薩摩国にも千葉氏は所領を持っていたのです。鹿児島県ですね。後で話しますけれども。そういう存在だということを押さえておいてください。

あと、千葉氏について豆知識みたいなことになりますが、常胤以前の千葉氏の一族は、「常」という字を通字、名前の1字に使っています。忠常とか常胤の「常」もそうです。ところが、常胤から後になると、「胤」という字を使っています。だから、「胤」という字がついている人の名前が中世の史料に出てくると、ああ、これは千葉氏の一族ではないかなという、大抵当たっています。若いころは、私は千葉氏おたくで、史料を見ると「胤」という字がすぐ目に入ってきたのに、このごろ全然入らなくなってしまって、もうだめだなと思っていますが、「胤」という字がついているのは千葉氏の一族だということは一般的に言えると思います。大まかな話を申しました。

ちょっと時間が押していますので、話が早くなって申しわけございませんが、一服で水でも飲ませていただくことにします。私は、大学でもそうですけれども、授業中は、飲み物を飲むのは自由にさせておきますので、皆さんも、お飲み物でもお持ちだったらぜひ飲んでください。ご飯を食べられるのは困りますけどね。最近の学生は私語をしなくなりました。そのかわり、スマートフォンを使ってお互いに隣と情報を交換していたりします。いかがでしょうか。奥様につまらない話を今聞いているとかということをしてLINEされている方もいるかもしれませんが。ちょっと落ちつきました。

それでは、次の「治承～文治内乱による所領獲得」、つまり千葉氏が常胤の時代からどのように全国に展開していったのかということについて、具体的に見ていこうと思います。

千葉氏が大きく発展したのは常胤の時代だということはよくご存じだと思いますが、それは源頼朝が伊豆で反平家の挙兵をしてからですね。一旦頼朝は石橋山の合戦で敗れるのですが、房総半島に逃れてきます。房総半島に逃れてくる前に、頼朝は関東の有力な武士たちに、これは前段階として、いろいろな在地の状況があつて、味方になってくれそうな存在をマークしていたのだと思いますけれども、千葉氏のところにも、要するに味方になってくれという手紙を送ったりしています。これに対して千葉氏は応じるわけですね。頼朝が挙兵したのは治承4年（1180年）8月17日ですけれども、これは反乱です。頼朝が挙兵すると、頼朝がいいほうで、平家が悪いほうだ、みたいな捉え方をする人がいますが、そうではない。これは国家に対する反乱です。千葉氏はそれに加担することになる。

最初の行動は9月13日で、これは旧暦です。ですから、1度千葉テレビで私が監修してつくって、9月の初め、セミの鳴いているシーンか何かを入れられてしまったのですけれども、実は秋ですね。9月13日に常胤の孫の千葉成胤、これを「しげたね」と読む人がいますけれども、「なり」です。「業」という表記をされている史料があるので、これは「なり」と読むのが間違いない読み方だと思います。人の名前の読み方は難しいのですけれども、恐らくこれは「なりたね」。それから、常胤の息子の胤頼が、頼朝と合流する以前に下総国の目代の館を急襲する。だから、千葉氏は自ら反乱に決起しているということになります。

千葉というと、政治にかかわっている方たちもおられると思いますが、保守王国ということでも有名ですよ。教育なんかでもそうです。私は定年退職していますから、ずばり言います。言いにくかったことを昔は言いませんでしたが、今は言います。ですが、中世においては、千葉というところは極めて革新的なところ、革命的な空間だったということは押さえておく必要がある。

というのは、反乱を起こしたら悪いということにはならないわけで、薩摩とか長州は、今の日本の国家をつくり上げているもとになっているような人たちが活躍した空間ですけれども、まさに反乱ですよ。江戸幕府という政府に対して反乱を起こしたわけですね。そういう人たちが今の日本の政府をつくっているわけですから、反乱を起こすと悪いほうだ、みたいな見方をする人が時々いるのですが、これはおかしい。先を見る目があつた。

要するに、革新的な風土がこの時代の千葉、下総国だったということになると思います。

下総の目代の館はどこにあったかという、国府台のあたりにあったと思います。市川に下総国の国府、今でいえば県庁があったわけで、そこを襲撃するということです。

しかしながら、そういうことをやると、当然のことながら政府側の鎮圧軍が派遣される。下総国には千田庄というところに平清盛の姻戚が住んでいました。藤原親政という人です。千田庄というのは現在の香取郡多古町、成田空港の東側のあたりです。あのあたりは、今はちょっと僻地と言うと、お住まいの方にはしかられるかもしれませんが、とてもいい場所だったようです。太平洋側から船が入っていた。銚子のあたりまで三崎庄という摂関家領の荘園があって、船が入ってしまして、大変立派な仏像なんかもあのあたりのお寺にあたりするので、中世前期のころには空間的にいい場所だったと思うんですけども、そこに藤原親政という、平清盛の姉妹を妻にしている豪族、武士がありました。これは武士といっても本来は貴族でありまして、2代前までは下総の国守、下総の長官をやっていたような存在です。在地の武士たちを編成して、このとき千葉常胤を攻撃するわけです。要するに、千葉を襲う。ここを襲撃にしに来る。『源平闘諍録』とかいう史料、当時の軍記物ですけども、これによると、1,000騎ぐらいの軍勢を率いて千葉庄を襲撃した。これを千葉常胤の孫の成胤が撃退したという話が千葉氏の伝承として残されていて、そのときに妙見神という神様が助けに来たというのです。それで撃退することができたということで、この事件は千葉庄の結城浜合戦と後に呼ばれるようになるのですけれども、それが千葉氏にとっても重要な事件として記憶されます。妙見神の示現譚、つまり千葉氏の嫡流には常に神様がついてるんだぞ、これに逆らうと大変なことになるんだぞ、妙見の怒りを買うぞということです。だから、一種のイデオロギー装置としてのお話です。

これをそのまま受け売りにして、妙見神というのはこんなに偉いんだと信仰するかしないかは内面の問題ですから、そういう問題と歴史とは別に考えていかなければいけない。別に考えなければいけないということを主張し、客観的な歴史を市民に提示するのが市とか教育委員会の仕事です。そのところは明確にしておかなければいけない。それで千葉氏は藤原氏を撃退することができて、頼朝が千葉に入ってきて、下総国の国衙に迎え、頼朝は下総国の統治を実質的に千葉常胤に委ねるということになるわけです。この結果、千田庄や相馬御厨など——相馬御厨というのは、今の取手市とか柏市とか、あのあたりですけども、その実質的な支配権は千葉氏の手に戻着するということになります。

千田庄については、場所は後ろの資料の9ページのBというところに書いてあります。

相馬御厨は、今、取手とか申しましたので、常磐線の沿線だということで、書いていないので申しわけないのですが、ご理解いただけたらと思います。

それから、先ほど申しましたけれども、千葉氏が大きな勢力を持つようになった契機というのは上総広常の粛清であります。さらに、千葉氏は木曾義仲や平家の追討にもかかわってくる。文治元年には、頼朝は鎌倉にそのままいるのですけれども、源範頼と義経、つまり頼朝の弟たちが代官として出征して、木曾義仲や平家と戦うわけですが、千葉氏の一族は範頼の軍に従っています。範頼というのは、『平家物語』などではあまり評価されないのですが、最近、歴史学のほうではとても評価されていて、実は範頼が壇ノ浦の合戦のときに既に九州を押さえているのですね。なので義経が活躍できるという状況をつくっているわけで、範頼もかなり優秀な武将だったようであります。

その配下に常胤が参謀格で加わっていて、常胤はどういう仕事をしたかというと、九州の平家没官領、平家側についた人たちの所領を没収して、新たに軍政をする。これは大変な仕事だと思いますよ。これをやった。その結果、彼はどこに所領を得たか。恩賞として得たのは、3ページの真ん中辺に「鎮西の千葉氏所領」と書いてありますが、豊前国上毛郡成恒名、現在の福岡県上毛町、肥前国小城郡、佐賀県小城市、薩摩国島津庄寄郡五箇郡・国内没官御領四一一町、原発がある薩摩川内のあたりです。甕島もそうです。それから、大隅国菱刈郡入山村、伊佐市菱刈というかなり内陸、こういったところを全部所領にする。恐らくこれは全部常胤が動いたところですよ。常胤は孫の常秀と一緒に動いている。恐らく常秀とか常胤は、こういう土地の人たちと京都で親交を結んでいたのでしょうね。だから、そういうことが可能だったということになると思います。

在京活動という言葉が、最近、武士の研究では盛んに言われますけれども、京都で活動したときの人脈が、日本列島各地で、千葉氏がいわゆる源平合戦のときに大きな意味を持った。ほかの武士もそうです。関東の武士たちが何で九州とか東北地方まで大きな勢力を広げることができたのか。見ず知らずの土地ですね。今だって弘前のおばあちゃんと鹿児島のおばあちゃんが電車の中で鉢合わせして、お互いに方言で話したら、何を言っているかわけがわからないですね。言葉が通じないですよ。それが通じてしまったというのは、共通言語としての京都の言葉とか、あるいは文書があったから。同輩、つまり京都の大学とか東京の大学で一緒だったみたいな関係が当時の武士たちにあった。非常に広域的なということを先ほど申しました。京都との関係は重要だと申しましたけれども、そういうことなのです。

恐らく豊前から大隅国に至るまで、常胤が動いたところが全部常胤の所領になって、それが子孫に分け与えられて、豊前・薩摩・大隅の所領は常秀、上総千葉氏の系統ですね。肥前の小城郡だけが千葉介家に伝領される。上総千葉氏のほうは、先ほど申しましたけれども、途中で滅びています。1247年に宝治合戦というのがあって、そこで三浦氏と一緒に滅びているので、肥前国の小城郡だけが千葉介家の所領として伝領されて、元寇、蒙古が日本に攻めてきたときに、九州に所領を持っている武士は、当主が九州に下れという命令が幕府から出るわけです。それで千葉氏は一族が分かれて九州に住むようになる。それで肥前の千葉氏が成立するということになるわけです。

3ページの5番、常胤のその後ですけれども、常胤は京都で治安維持をして、それが成功したなんていうことも史料からうかがえます。千葉常胤は、下総国の武士の下河辺行平という、弓矢のとても上手な、源頼家の弓術師範をした武士ですけれども、これと一緒に、文治3年に、当時、京都で関東の武士が狼藉ばかりしてしようがないというので、その取り締まりに出かけて行って、ごく短い期間にこれをうまくまとめています。だから、千葉常胤という人の力量がよくわかりますね。「彼の兩人上洛以後は、洛中以の外静謐なり」ということを、当時、権中納言だった藤原経房が鎌倉に報じています。これは吉田経房という人です。

さらに、奥州合戦で、先ほど申しましたように平泉の藤原氏を滅ぼす。文治5年（1189年）の合戦ですけれども、今の福島県とか宮城県の太平洋側のあたり、先年の大震災、大津波で被害を受けたのはみんなこのあたりなので、かつて千葉と血縁のあったような人たちの住んでいた空間が大変ひどい目に遭った。そういうときに、こういう歴史的な背景を千葉の方がご存じであれば、ルーツをともにする人々が大変な被災をされてしまったということで、何か協力ができたのではないかなということも考えられるのですけれども、そういう認識がなかったのはちょっと残念に思っています。つまり、歴史を知ることとはこういうことなのです。

そして、常胤は奥州合戦では最前に所領をもらう。要するに、一番最初に恩賞をもらうという立場になって、当時、御家人の中でトップの地位を得たということになるのです。7番目に書いてありますが、当時は年頭に鎌倉殿のおもてなしを一番最初にする御家人が御家人の筆頭ということになっていたわけで、常胤はずっとそういう地位にいたということになります。だから、江戸時代でいえば、加賀の前田家みたいな、とても重要な存在だったということが言えるのだらうと思います。

4 ページのほうに話を進めますけれども、翌年の建久元年（1190年）に頼朝は久しぶりに京都に上るわけですが、伊豆に流されてから随分時間がたっていますね。1160年に伊豆に流されてから30年後にようやく頼朝は京都に戻るわけですが、そのときに一緒に常胤や孫の常秀も上洛しまして、このとき孫の常秀は、おじいちゃんの譲りを得て左兵衛尉という官職を得ています。後の時代には兵衛尉というのは下っ端みたいなイメージがあるのですが、この当時、兵衛尉になるというのは大変なことでありまして、中央の京官とって、京都の官職ですね。孫の常秀がそういう地位になる。だから、孫でも成胤より常秀のほうが嫡流という意識を持っていたのだらうということがわかります。

それから、この年の6月には、東大寺の復興事業の中で戒壇院の造営を常胤が命じられている。これも、ただ常胤が金持ちだからということではなくて、当時、いろいろと調べてみますと、京都や奈良の寺院の復興に携わる武士というのは、かなり教養がある、仏教に対しての知識がある、あるいはこういう造営のための工匠たちを組織・動員できる人脈がある人が選ばれています。だから、そういう点では、千葉常胤も文化的に相当京都の文化とつながる存在だったということが想定されます。

常胤は建仁元年に84歳で死んでいます。時間もあれですけども、この会場にも私よりお年の方が結構多いのですが、私は今満65歳なのでですけども、千葉常胤が歴史上に登場するのは1180年で、千葉常胤は1118年の生まれです。ほかに1118年に生まれた人をどなたかご存じの方はいますか。平清盛とか西行。平清盛は1181年、数え64歳で死んでいる。だから、千葉常胤というのは、同年の連中が死んでしまったころから活躍し始めている。数え年63歳から10年の間に、それまでは今の千葉県千葉市中央区のごく一部ぐらいが本拠地で、多少ほかにも所領を持っていたような存在で、中小企業の社長さんみたいなものですね。これが日本列島各地に所領を持つ。東北地方から九州まで大勢力を持つようになる。そういう人生もあるのだなということです。

千葉常胤は勇ましいとか、頼朝から父のように思われたとか、そういうのではなくて、千葉の老人の——私も含めてですよ。私は今、千葉に税金を払っていませんが、ひいじいさんの世代からさんざん払いましたので、取り返したくてしょうがないなんて余計なこと。千葉の老人に元気を与える存在ですね。千葉には、こういう人がかっていたのだという点でもお手本になる。奥さんも元気ですよ。千葉常胤の奥さんは6人子どもを産んだと、ちゃんと『吾妻鏡』とかに出てきますので。『吾妻鏡』ではなかったかな。何しろ6人の子息たちというのは有名な存在で、みんな元気だったのですね。例えば、頼朝の子ど

もが生まれたときに、子どもがそろっている夫婦にいろんなことをやってもらいたいなん
ていうことが『吾妻鏡』に出ていますね。そういう存在です。だから、政治的な問題と
か、いろいろ難しい話だけではなくて、我々の生活にかかわる身近な問題でも、歴史の中
から結構シンパシーを持てるような情報は得られるのです。そういう人が実在したという
ことになる、これは市民にとって大きいですよ。また余計なことを申し上げてしま
いました。

そういうわけで、千葉介家というのは、その後、承久の乱などによって西国に多くの所
領を獲得して、各地に展開することになります。先ほど言いましたけれども、千葉介家は
伊賀国の守護職を得たり、一族の東氏は美濃国の山田庄、今の郡上市に所領を得たりとい
うことで全国に展開し、その過程で千葉の文化をそこに移植している。それから、逆に持
ってくるということもあります。だから、千葉から移住した佐賀県の小城には、千葉の地
名を名乗っている人たちがたくさん住んでいます。東北地方もそうですよね。逆に、小城
の武士が千葉に来て、千葉氏のもとで活動したということもわかっています。

だから、これも今の問題に当てはめると、千葉は今、全国から人が集まってきていま
すよね。自分の故郷と関係ない変なところに来てしまったな、何か柄の悪い人が多いなど。
私は千葉の人間ですから怒らないでください。よそから来て勝手なことを言っていると
思わないでください。先祖代々、千葉の人間。先祖が1,000年ぐらい千葉に住んでいま
すから。それは、私は昔から実感していましたけれども。よそから来たら嫌になってしま
っているかもしれませんが、実はそうではなくて、かつて自分の先祖が数百年前に千葉から
移住してきたのだと思うと、これはちょっと考え方が変わりますよね。だから、そう
いうものはとても大事だと思います。そういう点において、千葉というところはすごく都合の
いいところですね。よそから来た人も住んでいるし、ここから出ていった人がまた戻っ
てきたりということもあるわけで、そういうことで千葉という地域についての評価が市民に
とって変わってくると思います。

いろんな文化がよそから入ってきたり、あるいは移譲されたりしているわけでありまし
て、それを踏まえた上で、武士とは何かということで、先ほど京都との関係が非常に重要
だということを申しました。京都というのは日本の首都であり、王権の所在地であり、経
済の中心であり、文化の中心であり、情報の集積地であるということですね。ですので、
京都との関係というところをもう1回考えてみたいと思います。3番目の「鎌倉時代の千
葉氏と京都」。京都は武士と関係なさそうだなと思っていると大間違いです。

鎌倉幕府が成立する以前から千葉氏は京都とすごく関係がありまして、例えば千葉市、この場所は、先ほど申しましたけれども、千葉庄という荘園だった。誰の荘園だったのか。八条院という人の荘園です。千葉常胤の時代ですね。八条院とは何者かというと、京都の八条などに御所を持っていた女院です。後白河院というのはご存じだと思いますが、後白河院の妹でございます。そういう関係があった。だから、千葉というのは女性の所領だったのですよ。

八条院はどの辺に住んでいたか。八条院の御所は書いておきませんでした、10ページに京都の地図を入れておきました。時間があまりなくなってしまっていてあれですけども、京都女子大から来たので、ちょっと京都の話をさせてもらいましょう。「E 鎌倉時代の京都」というのがありますが、碁盤の目になっているのは京都の左京だけです。一番左に「朱雀」と書いてありますね。これが本来の平安京の真ん中の南北の道です。天皇はどこに住んでいるかということ、上に「大内裏」と書いてありますね。そこに天皇の御所があって、内裏があって、地図というのは上が北です。天皇は北から南を向いて、左側というのは、この地図で言うと右側ということ。それが左京です。天皇から見て左だから左京です。中世では左京が京都になります。右京のほうは平安時代のうちにすたれてしまいます。これは高校で日本史をちゃんとやった人はご存じだと思います。むしろ鴨川を真ん中に挟んで、鴨川の対岸、東山のほうが都市として開発されていく。例えば白河とか六波羅というのは、京都女子大学もそうですけれども、鴨川の東側のほうです。

この地図を見て、今、京都駅はどこにあるかおわかりになりますか。JR東海か何かで京都の宣伝をしているのだけれども、この地図を見せて、「京都の駅はどこですか」と言うと、おわかりにならない人が多いので困るのですけれども、下のほうに京都の小路の名前が書いてあって、右のほうから東京極、富小路、万里小路、高倉小路、東洞院とあって、その隣に、これは鳥丸ではないですよ。鳥丸と書いて「からすま」。これが今、京都のメインストリートですね。京都駅をおりて真っすぐ北に道があって、京都御所があって、同志社大学があるという道です。地下鉄の鳥丸線というのが通っている。ですから、この鳥丸通りと八条大路との交差点あたりが京都駅です。新幹線に京都駅八条口がありませんでしょう。

というわけで、京都の位置関係がおわかりいただけたと思いますけれども、今、京都の八条口と言いましたが、京都駅のちょうどその場所に八条院は御所を持っていたのです。私も修学旅行で17歳のときに初めて京都に行って、まさか京都に住んで、京都女子大の先

生になるなんて思わなかったのですけれども、ここに千葉を所領としていた女院が住んでいた。女性ですよというのを思い起こしていただくと、京都に行ってもちょっと気持ちが変わりますよね。こういうところが歴史をやる妙味ですよ。何かうまいものを食べてというのは、だめではないけれども、そればかりではいけませんね。

右大臣徳大寺公能と常胤の関係は、鎌倉幕府が成立する前に、千葉常胤が相馬御厨という荘園をめぐってちょっとトラブルったときに、京都の貴族の徳大寺公能を頼ったということが伊勢神宮に残っている文書からわかるのです。だから、徳大寺家と千葉氏は関係があった。

それから、東氏の先祖の千葉常胤の六男の胤頼が上西門院にお仕えしたということがわかります。上西門院とは何者かというと、統子内親王、今度は後白河院のお姉さんです。この時代は女性が活躍しているのですね。この上西門院にお仕えしたおかげで、胤頼は五位の位をもらった。叙爵、貴族の一員になったということです。

それから、常胤の息子の中には、三井寺、大津市の園城寺に入っていた人もいて、日胤という人ですけれども、この人は、下総国の常胤が頼朝に味方する以前に反平家の兵を挙げた以仁王とか源頼政とともに動いて、既に討ち死にをしています。こういう存在もいた。だから、千葉氏というのは、頼朝が挙兵する前から京都と非常に関係が深いのです。

鎌倉時代になってからは、京都大番役で千葉氏が京都にしょっちゅう上っているということが、中山法華経寺『日蓮遺文紙背文書』で数十年前に明らかにされています——つまり、日蓮の書いたメモですよ。それが国宝として今も大事にされているわけですが、表装されて残っていて、その裏側に、日蓮の信者だった千葉氏の被官、富木常忍という文筆官僚が、日蓮さんに「これを使いなさいよ」と言って、あげた書類に書かれていた文書が残っていて、本来だったら廃棄されてしまう文書ですね。例えば、市役所で使っていたシュレッターにかけてしまうような紙が残っていて、その中に、当時の下総の守護が何をやってたか、下総国で何があったか、どんな事件があったか。訴訟があったり、女性が自分の財産を守ってくださいと訴えたり。当時の千葉の女性は偉いですよ。今でいえば市役所のキャリアウーマンみたいな女性なのですけれども、胡蝶という名前がわかっている。マダムバタフライですよ。そういう女性がいて、自分の人生を語り、自分の財産に対する権利を主張する、そんな文書が千葉には残っているのですよ。千葉の女性はずっと男性の下に虐げられているみたいなイメージがありますが、そんなことはない。

ところが、そういう史料があまり市の歴史に反映されていないのです。苦言を呈しますが、もったいない。そういう史料で千葉の歴史を語れば、女性の歴史は幾らでも語れます。私を呼んでくれれば幾らでも話しますし、カルチャーセンターでそういうことを語る先生がいる。千葉には東大の先生とかがたくさんお住まいですから、そういう人たちを呼んできたり。そういう人とかかわりが今まで弱過ぎです。お話ししてもらえれば、千葉の市民は知的レベルが、と言うと、またちょっと上から目線みたいな話を野口がしている、不届きだと言われるかもしれませんが、ほかに言いようがないので申し上げますけれども、かなり向上すると思います。市当局とか行政に対する批判の目も厳しくなることは必然ですが、これはとても大事なことです。

そういうことで、千葉氏は京都との関係が深いわけで、千葉氏が鎌倉時代に京都でどういうことをしていたか。京都で例えば肥前国の所領の裁判もしていますし、伊賀国の守護職も持っていますから、西国の所領の、当時、成敗と言われますけれども、いろいろな処置をするということですね。何しろ京都の貴族とかお寺と交渉しないと話が進みませんから。

それから、そういうときに千葉氏はどこに住んでいたのか。京都に宿所があった。これについても最近いろいろな史料がわかっている。小早川家文書によって、四条堀川とか四条油小路のあたりに、どうも千葉氏が小早川氏と争っていた所領があったということは前から明らかです。それから、後で申し上げますが、了行というお坊さんについての史料から、京都の大宮大路に面したところに所領を持っていたということもどうも明らかです。それから、最近、高野山大学の坂口太郎という若い研究者が明らかにしてくれたことですが、清水坂に千葉介の宿所があった。一寸法師が鬼退治したところですよ。本気にしないでくださいね。これは『御伽草子』の話ですけども、これが石清水八幡宮に残っている文書から明らかにされました。だから、千葉の高校生が修学旅行で京都に行っても、この辺に千葉介の宿所があったのです、みたいなことで行くとおもしろいですよね。それから、三十三間堂をつくるのに千葉氏が相当お金を出している。負担しているのです。そういうことを知って行くと全然違うのですよね。木刀を持って、けんかなんかしなくなってしまうのです。我々のころはやったのですけれども、今は知りません。

次に、「西国所領の経営基地としての京都」というのは今大体申し上げたとおりで、有力貴族の西園寺家に馬を持っていったりもしているということです。

あと、申し上げなかったことで、千葉介による闘乱事件の記録もあったりするのです。

調べてみると、これもおもしろいですね。千葉介というのはみんな偉くて立派でと、そんなわけではないので、当然のことながら時々変な人もいます。13世紀の半ばぐらいに、ある貴族と女性をめぐるトラブルを起こした話もあります。貴族の邸宅に押し入ってしまった。千葉介の家来がいろいろぶち壊してしまった。

ほかに三浦氏の一族なんかにみどりい人がいて、貴族の腕を折ったり、足を折ったりして、そのまま馬に乗って宇治まで行ってしまった、家まで壊してしまったなんていう話もありますので、関東の武士の中には荒くれ者もいて、京都でいろいろトラブルを起こしたなんていうこともありますし、例えば、千葉氏の一族の千葉胤時という人物がいるのですが、京都で信濃国の小笠原氏の娘と結婚をするというので、藤原定家の家に牛車を借りに行ったなんていう話もあります。こんなのはとてもおもしろいではないですか。千葉介の一族の武士が京都で結婚式をやるので、藤原定家さんのところに牛車を借りに行った。今でいえば、おまえ、レクサスを持っているじゃないか、ちょっと貸してよ、みたいな感じなのでしょうかね。そういうことをやっているのですよ。そういう話がちゃんとあるのです。一次史料ですよ。変な伝承ではなくて、藤原定家が日記に書いているのです。そういうものを探して、それを市の歴史に還元するというのはとても楽しいことだと思います。

さて、東アジアはどうなっているのだということになるので、最後に「千葉氏一族出身僧の渡宋・渡元」という話に進みますけれども、時間があまりなくなってしまいました。私は時間を1時間15分いただいているので2時45分。でも、始まるのが5分遅くなったから2時50分までである。だって、皆さんの税金で講演料を少しいただいているのです。ですから、1分幾らにしたら申しわけないので、ちゃんと。でも、余計な話をしているからマイナスになるのかもしれない。すいません。これは録画されてテレビで放送されると言っているのですけれども、困ったものですね。まあいいです。私は恥をさらすために今後の人生をささげますので。

それで、「千葉氏一族出身僧の渡宋・渡元」というところに話を進めますが、千葉氏の一族の中から、京都どころではなくて中国まで渡って活躍しているグローバルな存在がいるということです。私は、これを10年か20年前に発見して、大発見で千葉の人はとても喜んでくれると思ったのですけれども、千葉のマスコミは全然飛びついてくれなかったですね。研究者の中では随分飛びついてくれたのですけれども。もし私が子どものころこれを知っていたら、仏教史か何かを始めていたかもしれないような話です。

了行という人物がいます。お坊さんだからこんな名前ですけれども。2ページに「千葉

氏とその一族」という系図がありますが、その中に、下のほうに四角で囲って「了行」と書いてある。こういう系譜です。下総国千田庄の原氏の一族の出身のお坊さんで、この人が、なぜか、経過はわからないのですが、恐らく千葉介、千葉氏を介して京都の九条家と関係を結んで、お坊さんになればあまり身分規制がないので、これは国文学の研究者の成果によっているのですけれども、1234年から1240年の7～8年の間に渡宋しました。当時、中国は宋といいました。中国に渡って、宋版一切経という数千巻にわたるお経を日本に持ってきたのです。そのときに、一切経以外にもいろんなお経を持ってきたということが滋賀県にあるお寺に残っている。持ってきたそのものが出てきているので、わかっています。彼は法印というお坊さんの位では一番高い位まで行ってしまっ、さらに、九条家という当時の摂関家のお堂の住僧になっている。それから、千葉氏が天皇の御所の閑院内裏の西対の造営を担当したときに、朝廷と千葉氏の間に入ってすごく活躍するのです。このあたりについても中山法華経寺の『日蓮遺文紙背文書』、例の日蓮さんの書いたメモの裏に残っていた史料からわかるのですけれども、千葉氏の代官なんかに対して相当強硬な対応をとって、やたらに怒ってばかりいて大変だという話まで載っていて、当時の役人の苦悩までが書かれていておもしろいのですが、そういう人物です。

そういうわけで、この人はだんだん態度が大きくなって、最後には建長の政変という事件を起こします。5ページが一番上に書いてありますけれども、当時、鎌倉幕府は九条家出身の将軍なのですね。源氏3代が滅びた後、京都の摂関家出身の人が将軍をやっていたのです。3代が源氏で、その後の4代目の将軍の九条頼経が京都に戻ったのですけれども、それを推し立てて、また九条家を中心にした体制をつくろうというクーデターを起こして殺されています。矢作左衛門尉という千葉氏の国分氏の一族も一緒に討たれている。こういう話は千葉氏の一族が悪さをしたみたいなイメージで捉えられているのですけれども、政治的に相当大きな力を持っていたからこういうことができたので、この辺のことも解明していくとおもしろいかもしれませんね。

了行が渡宋したことについては、5ページに「①了行の渡宋」と書いてある。それから、閑院内裏の造営に関係したということは②に記しておきましたので、史料とあわせて、ちょっと難しいかもしれませんが、これは、本当はきちんと読んでお話ししたかったのですが、時間がないのでできませんから、ご覧いただければと思います。

というわけで、まず了行さんというのが中国に渡って、宋版一切経を日本に請来し、中央の政界の中でも非常に大きな役割を果たした。そういう人がこの時代に出ているという

ことですね。これを押さえておいていただければと思います。

もう一人、道源という人がいます。道源といっても曹洞宗を始めた道元ではなくて、これも2ページの系図を見ていただくと、先ほどからるる申し上げています京都との関係の深い千葉氏一族の東氏の中で、東胤頼の次男の胤朝から出ている木内氏の出身。木内胤朝の孫に胤直とあって、今の小見川のあたりに所領を持って、小見四郎胤直と名乗っていた人物ですけれども、この人物がお坊さんになって中国に渡っているのですね。この当時は、正式には元の時代です。千葉氏一族という全体のくくりの中で千葉道源と書かれている史料もあるのですけれども、この人は小見と名乗っているので、小見川のあたりにだけいた人だと思われがちですが、実はそうではなくて、小見氏のもとである木内氏というのは、承久の乱の後に淡路国とか大和国に所領を持ったということをしきり申しましたね。彼は、まさに淡路で荘園を営んでいるのです。

武士というと江戸時代の武士をイメージすると、武士は食わねどという感じで、あまり商業活動をしないうちにイメージされてしまいますけれども、とんでもない話で、畿内、京都の周りで盛んに経済活動をやっているのですね。特に木内氏というのは、東国においても、今の霞ヶ浦、常総内海といいますけれども、常陸国と下総国の間の大きな湖の周りにたくさんの小さな港町がある。網野善彦という20世紀の終わりごろに活躍した社会史の大家は、都市が48あったのだということで高く評価されておりましたけれども、そこをまたにかけて商業活動を盛んに行っていた一族なのです。

同時に、関東だけではなくて、淡路国の所領を根拠にして、西国、つまり今でいえば京都、大阪でも大変な経済活動をやっていた。もちろん、それは恐らく東アジア規模で動いていたと思うんですけれども、その胤直が出家してお坊さんになった後、やはりそういうことが背景にあったのだと思います。中国に渡ろうとする。信仰心と同時に、中国に行って自分で仏教を確かめようという気になったのでしょね。そういう情報を得ていますから。それで、太政大臣だった西園寺実兼の援助を得て、どういうルートでそういうことをしたのか、小説のネタにでもなりそうなところですが、中国に渡って、やはり天台山に行って、普段開けてくれない倉庫を開けさせるようなことをしたようです。それが資料の下に出ています『大日本仏教全書』の中に入っている「釈尊影響仁王経秘法」奥書。こういうものを読むのは難しいですね。

彼は、そのような活動を行いまして、6ページの上のあたりに千葉道源の出自とか、鹿島神宮寺の浄行僧になったとか、例えば淡路国でどういう所領経営をしたということにつ

いての史料はここにありますが、それを挙げておきました。

6 ページの真ん中から下のあたりに『摺拾集』という史料を挙げておきました。さらに、そのまた下に『徒然草』の百七十九段を挙げておきましたが、そういうところの記事を見ると、彼は、日本に戻ってきてから後、京都の六波羅、先ほどの10ページの地図に書いてございますが、京都女子大学とか建仁寺の近くです。平清盛が本拠地にしたところから、六波羅探題が置かれたところから、今、六波羅蜜寺があるあたりです。そこに那蘭陀寺というお寺をつくった。六波羅の焼け野というところにお寺を開いたということがわかります。『摺拾集』の記事によると、数千巻のお経を2セット持ってきたというのです。途中で船が難破しそうになったので、1セットは海に投げたら、日本武尊が走水を渡ったときみたいな感じで、そのときはきれいな弟橘媛が身を投じて海がないわけですが、お経で竜神さんは海を穏やかにしてくれた。それで日本に戻ってきたという話が伝わっています。その辺はうそでしょうけれども、何しろ数千巻のお経を日本に持ってきたということですね。

さらにおもしろいのが、彼は兼好法師と親交があった。兼好法師というのは、私どもが高校生のときには吉田兼好と習った。『徒然草』の「つれづれなるままに」という、あのおもしろいおじさんですね。あのおじさんが書いた随筆は、おもしろくないところだけが高校の教科書には載っているのですよね。何で教科書って、ああやってつまらないところだけ載せるのか。教科書をつくる人というのはまじめなのですよ。まじめでないと、私みたいなばかりが日本中にいると、世の中は秩序がなくなってしまうと思いますけれども、その兼好法師。今、研究が進んでいまして、吉田兼好という人物はいなかったのです。これは明らか。兼好法師が正しいのです。ト部兼好という人もいたのですが、吉田兼好ではない。これは小川剛生という慶應大学の先生が明らかにしています。研究というのはだんだん進んでいるのです。だから、私たちが昔習ったことで、そのまま子どもや孫にこうだぞと教えると、うそばかりになってしまいますので、常に勉強してください。私もほかのジャンルではちっとも勉強していなくて、そんなことを言えた義理ではないのですけれども。

それで、兼好法師の書いた『徒然草』の中に6 ページの下のような話があって、これ以外にも『徒然草』の中に道源がもう1カ所出てきます。兼好法師とお友達だったみたいです。そういう人が下総にいた。私が千葉東高で『徒然草』を習ったときに、兼好の友達に千葉のやつがいたんだよ、みたいなことを知っていれば、もうちょっと『徒然草』の勉強

をやる気になった可能性があるのですけれども、皆さん、どうでしょうか。

ところで、道源とか了行が千葉にいたときにはどこで勉強したのかということですが、それは千葉寺なのです。千葉寺をご存じですよ。海上山千葉寺（せんようじ）というより千葉寺（ちばでら）と言ったほうが私たち世代にはわかりがいい。千葉というと、さっきもちょっと言いましたが、はっきり申し上げて、あまり知的な空間ではないですよ。昔トルコ風呂といったようなところがあったり、あまりいいイメージがない。私は、青山学院というところで、大学に入ったとき、お嬢さんたちと随分おつき合いしましたけれども、彼女たちの持っている千葉に対するイメージというのは、「ああ、あの千葉ね」というイメージだったわけです。井上ひさしという小説家は、夫婦何とかという小説の中で総武線と小田急線を比較して、小田急線は上品なお嬢さんの乗る電車、総武線というのは恐ろしい電車。昼間から酒瓶が電車の中に転がって、お酒が床の上に充満しているというイメージ。私も実際にそういう現場に遭遇したことがありますけれども。地価も安い。だから、東京に住んでいる人が最後に家を建てるのは千葉だと。市長さんとか偉い人のいる前で、こんな話をする講演者というのはいませんか。帰りに講師料を返せと言われるかもしれませんけれども、でも、そういうことも言っておいたほうがいいのであります。

ところが、皆さん、中世はそうではないのです。千葉というところは極めて知的水準の高いところで、8ページの資料Aを見ていただくと、こんな文化活動を千葉でやっているのですよ。千葉庄というのは大体千葉市中央区ですが、「千葉庄内における聖教の刊刻・書写と奉授」、つまり千葉で、今でいえばすごい研究所とか、研究成果がどんどん印刷されて全国に還元される。千葉大学どころではないでしょうねと言うと、また千葉大の先生に怒られるので、何を言っても怒られてしまうのですけれども、相対的な意味で、千葉が非常に文化的な発信力のある空間だったということがわかるわけです。

その中で、特に千葉寺というのは真言密教を学ぶ人たちが盛んに活動していた。関東で有名なのは金沢称名寺です。金沢称名寺というのは石川県ではないですよ。横浜市金沢区の花沢称名寺です。花沢文庫というのがあるところですね。そこと対比されるくらい。千田庄の土橋山東禅寺というお寺も非常に有名ですけれども、ここにおられる遠山先生はそのあたりをご研究されていますが、とても文化の薫り高い空間であった。そして、経済の中心でもあったということがわかるわけです。そういう列島規模のネットワークもあるけれども、その中で千葉というのが非常に大きな意味を占めていた。

あと、サミットとのかかわりでいえば、千葉で行われていた祭礼とか都市空間の構造

が、例えば小城には非常に大きな影響を与えているということです。あるいは逆に小城の文化が千葉に導入されている。それでお互いに理解をすることがとても重要だということになると思います。

最後に、「千葉氏研究の課題」というのを書いておきました。私は、せっかくこういう場所で話をさせていただくので、一種のメッセージなのですが、これから千葉氏の研究をするに当たって、このようなスタンスをぜひとっていただきたいということです。列島・東アジア的視野の中で地域を理解する姿勢。地域にこだわって、うちの隣の人の先祖は何とかだ、みたいな話はやめたほうがいいだろう。もちろん、やってもいいですよ。知的好奇心というのは大事なのですが、宗教的なものと混同しないようにしなければいけない。内面の問題ですから、それとは違うのですね。

それから、一次史料を使いましょう。『日蓮遺文紙背文書』なんていうものがあったり、お公家さんの日記があるのに、何で江戸時代の軍記物みたいなものとか伝承みたいなものを一義的に使うのか。これを使うのは大変なのです。どの部分が正しいか、どうしてこれが使われたのかということ进行分析した上で使う。これは大事です。だから、その研究そのものは否定しませんが、一義的には、やはり一次史料を使うべきだろう。

それから、ほかの研究ジャンルとの連携です。中世考古学、例えば千葉氏の館はどこにあったか。これは亥鼻山にあったと私は思っていたのですが、さっき千葉会長さんにお話しいただいたように、千葉氏に憧れを持って歴史の道に入ったのですが、実は考古学の研究によって、どうも宗教施設みたいなものは亥鼻山の上にあったみたいですが、城郭的な施設は中世後期、15世紀以降のもののように。ですので、ほかの中世前期の在住領主と同じように、鎌倉時代は川に近い低地に守護などが館を置く。足利の鑿阿寺なんてそうですよね。あれは足利氏の居館の跡です。だから、可能性が高いのは、例えば千葉地方裁判所とか本町公園のあたり。そこの発掘調査をぜひやってもらいたい。もう地方裁判所はだめでしょうけどね。いいところはみんなだめになっていると思いますけれども、千葉から庭園遺構とか、何かすごいものが出てくる可能性がありますよ。そういったこともぜひやってもらいたいと言うと、行政の方は、そんなことを言われると困るなど。私は、わざわざ困ることを言っています。いろいろ利権の問題がありますからね。だけど、百年の大計というのはございます。

それから国文学では、『源平闘諍録』、『平家物語』の一異本が千葉氏の手によってつくられている。これは千葉の人はあまり知らないですよ。『源平闘諍録』とか、最近では

香取本『大江山絵詞』なんていうのも、どうも千葉氏がつくったもののようです。文化水準が高い。『大江山絵詞』というのは大江山の酒呑童子の話で、絵巻です。そういうものの研究もあまりされていないですね。最近、北海道教育大学の鈴木哲雄さんが始めました。

あと、建築史。

そして、先祖がどうだとか、合戦をやって誰が勝ったとか、こいつは忠義を尽くしたとかというのもいいのですけれども、それは歴女みたいな人にやってもらえればいいので、もうちょっと市民に還元する、あるいは千葉市の将来に資するものとしては、例えば中世都市千葉の空間構造はどういったものだったのか、あるいは千葉寺の文化環境はどうだったのかということ。市民的な問題意識で、事大主義的な発想を捨てて、「顕彰」という言葉がありますが、見えないいいものを明らかにするという顕彰ならいいのですけれども、本当はないものをでっち上げて、うそをついて、こんなに偉かったでしょうという顕彰になりがちなので、それはやめてもらいたい。それが地域振興でよくあるのです。それはだめです。

それから、女性や民衆の生活は重要です。特に女性。女性は、実はとても大きな活躍をしているのに裏に入ってしまった。若いころ歴女で、石田三成様なんて言っている女の子は女子大学にもたくさんいて、そういうレベルの歴史好きはいますけれども、知的な女性は、本当の意味で日本の社会に対して嫌悪感を持っている女性のほうが多いです。知的な女性でない女性はそうではないかもしれないと、ちょっとまた嫌なことを言いますが、です。ですので、そのような観点から、これからぜひ千葉の歴史について考えていただきたい。それを前提に地域振興していただきたい。

下のところに書いてございますが、これは私の今年卒業した学生が書いた卒論を前提にした論文の中の一節なのですけれども、その子は今銀行に勤めています。「真の地域振興とは、そこに住む人々がその地域の歴史や伝統を知る事によって、ここに住んでよかったと心の底から思えるような『まち』を自分たちの手で作っていくこと。経済効果の前提として、人々が、自らの暮らす地域に対する誇りや、経済的利潤では購えない充足感、いわば『心の福祉』のようなものが、まず実現されるべきである」。これはなかなか名文だと思います。東川さんという女子学生が書いたのですけれども、若い人の中でもこういうことを考えている人もいるわけですから。

私自身にとってもふるさとである千葉がこれからのいい形で発展していくために、こんな

いい材料のある都市というのではないと思います。小城でも同じようなことを言っていて、ばれてしまうのですけれども、歴史資産というのは、くめども尽きないものがあるのです。その中からどういういいものを持っていくかというのは住んでいる住民たちの力による。どれだけ知的なものを吸収して未来に活用していこうかということは住んでいる人たちの力によるものです。私の孫も千葉におりますので、最後はそんな話に帰着して、大したことはないことになってしまいましたけれども、ぜひ市民の方たち、あるいは市の方たちにも頑張っていたいただきたいと思います。

というわけで、非常に雑駁な話をさせていただきましたけれども、ご清聴ありがとうございました。これで失礼いたします。(拍手)

○司会 野口先生、ありがとうございました。会場の皆様方、勉強になりましたでしょうか。野口先生にもう一度大きな拍手をお願いいたします。(拍手) 先生は、本当はまだまだお時間が欲しかったのだと思いますが。

ここで休憩時間なのですが、15分の予定でしたが、10分とさせていただきます、次の部は15時5分開始とさせていただきます。